



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年10月18日 年間第29主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書45章1、4-6節

第二朗読：テサロニケの信徒への第一の手紙 1章1-5b節

福音朗読：マタイによる福音書22章15-21節

今日のテーマ：神にお返しする（神に帰する）生活

三つの朗読から

第一朗読は時代背景を知らないと味わえないかもしれません。イザヤ書40-55章は第二イザヤと呼ばれています。預言者が活躍した時代は、バビロン捕囚（紀元前597-538年）の終わり頃だといわれています。彼は、神が捕囚の民を解放するためにペルシャ帝国の最初の王様キュロスを遣わしたのだと主張します。これは人々にとって受け入れがたいメッセージでした。しかし、キュロスは紀元前550年にメディアを陥落させ、546年にはリディアを征服し、バビロンを狙って接近してきました。そんな時代背景が今日の朗読箇所にあります。「わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない」（イザ45章5節）は、神さまという方はご自分のことを人間に余すところなく教えてくれる方であることを示した一節となるでしょう。

第二朗読では『テサロニケの信徒への第一の手紙』が今週から読まれ始めました。ここでも背景を知っておくといいいでしょう。テサロニケは自然に恵まれた良港と、ローマと東方世界を結ぶ街道という交通の要となる地にある都市です。パウロは第二回目の宣教旅行でこの地を訪れました（49年頃）。ここにはマケドニア人とギリシア人が住んでいましたが、ディアスポラ（離散ユダヤ人）の居住地も存在したのです。

その後パウロはフィリピンに到着して、この地でも教会を設立しました。ユダヤ人のシナゴグ（会堂）を拠点に宣教活動を開始し、多くの異邦人からの改宗者を生み出しますが、ユダヤ人からの妨害に遭い、パウロは短期間でアテネへと出発しています。

この手紙はパウロの中で一番古いものです（50年頃）。コリントの町から、もう一度テサロニケを訪れたい旨を手紙にしたためています。ですが、ユダヤ人の妨害から、テサロニケ訪問は実現しません

でした。結局、第三回宣教旅行で訪問を果たします。書簡の半分(3章13節)までが感謝の内容となり、その後はキリストの再臨について論じています。今日の朗読箇所は書簡の冒頭の部分ですが、パウロはテサロニケにテモテを派遣し、コリントでテモテの報告を受けます。それは、テサロニケの人々がしっかりと信仰に立ち続けているという事実でした。感謝の内容にあふれているこの手紙だからこそ、「神に感謝しています」(1テサ1章2節)は響くことばです。パウロは宣教のめぐみをたくさんいただいて、そのお返しとして神に感謝をささげます。

福音朗読では、イエスさまは「神に返しなさい」と命じています。神からいただいたものを、自分のものとしてはならないのです。

説教

デナリオン銀貨の実物を見ることがあります。小さな銀貨です。ローマ帝国の最小の貨幣単位です。これが帝国中を流通していたわけですから、そこに刻まれている皇帝の姿と銘は世界中に広まったわけです。「これは、だれの肖像と銘か」(マタ22章20節)とイエスさまは問いかけます。「肖像」と訳されたことばはギリシア語で「エイコーン」といいます。このことばは「似姿」とも訳されます。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」(21節)というイエスさまは、次のように伝えたかったのではないのでしょうか。つまり、「皇帝のもの」とは銀貨に刻まれた肖像(エイコーン=似姿)のことですよ。「神のもの」とは神の似姿(エイコーン)としての人間のことですよ。ローマへの納税も大切でしょうが、それよりも大切なのは神の似姿として生きていくことですよ、と。

皇帝のものを皇帝に返すのは至極まっとうなことでしょう。納税の問題については十分な回答となっています。しかし、ファリサイ派の人々にとって人間が神のもの、神の似姿であることは眼中にありません。人間は神の似姿(創1章26節)であり、そのころには、中心には神のことばが刻まれています(エレ31章33節)。自分が神に属していると気がつけば、神に仕える者となるのは当然なことです。

「返しなさい」ということばを響かせたいです。よいものは神さまから来ます。神さまからいろいろなよいものをいただいて人間は生きていきます。アシジの聖フランシスコは「わたしたちに属しているのは悪徳と罪だけである」とまで言い切りました。神さまからいただいたよいものを自分のものにしてはいけません。神の似姿(エイコーン)として、人間のところに刻まれた神のことばを神へとお返ししていくのです。お返しする人生こそが、人生後半の生きる姿のように思います。今週、どこかで読んだ週刊誌のグラビアには田原総一郎という評論家がたくさんの本に囲まれて写っていました。どこか、自慢げな視線を向けるこの老評論家の姿に、人の世のはかなさをみたような気がしました。神へとお返ししていく道のりはつらく苦しいものですが、すべてを手放した時に大きな喜びが待っているのです。

